

東京新聞

中日新聞東京本
東京都千代田区内幸町二丁目1
〒100-8505 電話 03(6910

地域と連携 防災活動

栃木市で、東日本大震災の発生以前から、地域と連携して災害に備える活動に取り組んできた高校生たちがいる。二〇一一年度「防災まちづくり大賞」で消防庁長官賞を受けた実績もある学悠館高校のJRC(青少年赤十字部)の皆さまな活動はかつて一人の部員が抱いた疑問から芽を吹いた。

学悠館高校 JRC部
(吉岡潤)



高校生 VOLUNTEER AWARD 2017

「高校生ボランティア・アワード」で、さたまさしさん(後列右から6人目)と写真に納まる部員たち(前列)とさいたま市で(いずれも学悠館高校提供)

「どつめのために」
「自分でも勉強してみようかな」。そんな言葉をかけられて、部長の成尾裕加梨さん(じ)は「やりがいがあるなあ」と充実感で胸を膨らませた。
八月九、十日にさいたま市のさいたまスーパーアリーナで開かれた「高校生ボランティア・アワード」。

八月九、十日にさいたま市のさいたまスーパーアリーナで開かれた「高校生ボランティア・アワード」。

学校が避難所知っている？

「災害が起きたら、学校はどのようになるんだろう。部員らは市役所で過去の災害や被害状況、市の防災体制を聞き取り、避難所の運営を聞き取り、避難所の運営



8月に那須町で開かれた「山の日」記念全国大会の会場で、救急法を指導する生徒ら



ことを知っているのだろうか。〇八年、生徒や教員に加え、地域住民の防災意識を高める狙いで「防災講座」の開催へ動き始めた。市の災害図上訓練に参加し、日本赤十字社を訪れるなどして知識を蓄えた。

〇九年、市や日赤県支部と協力し、地域住民を学校に迎え、防災講座をスタート。避難所運営を説明し、図上型防災訓練、炊き出しなどの生活支援や救急法の講習を行った。

一年三月に東日本大震災が発生。同年七月、部員も連れ立って宮城県や岩手県の被災地でがれきの撤去などに汗を流した。大島教諭は「以前から防災に取り組んできたから、何かをしたい」と声が上がったのだと振り返る。

同年九月の防災講座のうたい文句は「となりのお年寄り」をキーワードとして参加してみませんか。避難所で「弱者」となる高齢者を支援するための知識や技術を習得するプログラムを組んだ。部員らには新たな疑問もわいた。「地域の人たちは学校が避難所になっている

生徒の疑問きっかけ 講座スタート

全国の防災に関する優れた取り組みを表彰する「防災まちづくり大賞」の消防庁長官賞を受けたのは、一二年三月、生徒の発案による避難所運営プランの作成、防災講座の開催などが評価された。

その後も部員は入れ替わりながら、あれこれ知恵を絞り続けている。各種イベントの会場で救急法を説き、自治会の要望に応じて「出前講座」にも出掛ける。避難所づくりには聴覚障害者や外国人も招いた。今年二月はスペースや物資が十分でない中、子どもたちが他人や要救助者に対する気遣いや工夫を学ぶ内容にした。

子どもから高齢者まで幅広い世代と一緒に防災を考える取り組みの中で「私たちは懸け橋になれる」と副部長の渡辺美雪さん(じ)は言う。大人たちは過去の経験や知識を教える。若く柔軟な頭は、子どもたちに分かりやすく伝えるアイデアを次々と生み出す。大島教諭は「生徒たちは自分たちで考え、自立している」と頼もしそうに見ている。